目　次

・法人化問題をめぐって……1
・月例会報告……2
・日本万国博覧会を動かす人々……3
・日本万国博覧会をつくる人々……4
・大丸研匠会ヨーロッパ伝統家具
　復元展を討論……7
・事務局紹介……9
・賛助会員紹会……10
・新入会員紹会……10

jid
日本室内設計家協会

No. 32

THE JAPAN INTERIOR DESIGNERS' ASSOCIATION

法人化問題をめぐって

協会は今法人化の手続を行っているが　任意団体と法人団体とではどんな違いがあるか，私は別に法律専門家ではないが，事務担当する立場から，わかりやすく解説して見ました。

一口に法人といっても営利を目的とする営利法人（株式会社）と公益を目的とする公益法人があります。そして公益法人の中には寄附財産をもとに公益を目的とした事業を行う財団法人と会員（社員）の会費で公益の事業を行う社団法人があります。

われわれの協会は「室内デザインの健全な高揚を計り，産業経済の発展に寄与する」ことを目的としてり，会員の会費で運営しているのであるから・社団法人に概当する性格の任意団体といえるでしょう。

そこでわれわれが法人化の申請をするということは，社団法人日本室内設計家協会（仮称）の設立を意味するものであります。

☆法人化を申請する意義

法人化する意義は，法人として「法律上の権利義務の主体」となることができるという点にあります。

従って次のような点で今後の運営に違いがでてきます。

(1)　社会的発言権が強よまる。

社団法人は主務官庁（通産省）の許可制度となっているので，対社会的（国会・政府・報道関係など）な信用ができ室内設計家の公的な意見として認められ発言権が強くなる。

(2)　財産は共有のものに

協会も事務所を設けたりいろいろな事業を行ってくると，年間数百万の金が動くようになりました。これらの任意団体では人格がないので，理事長個人名で預金している現状です。法人として認められて始めて法律に「総有的に社員に帰属する」財産として協会名で預金することができます。

また対外的に問題が生じた場合，法人でなければ裁判などの訴訟能力がありません。

(3)　税法上の特典

公益法人には原則として課税しないことになっています。

従って団体としても税法上の利点があるとともに・会員の会費や寄附金についても公租公課として税金などと同様損金として認められるようになります。

(4)　事業に信用が

出版・講演・研究会などの各種事業を行う場合日本の現状では主務官庁の認可を得た団体が行うということであれば一般に会社官庁などからの参加がしやすくなり，事業がやりやすくなります。

また監督官庁がその事業に意義を認めれば協賛その他の方法で助成を受けることができます。

以上が法人化の意義および利点ですが反対に法人化する上にどんな問題点があるだろうか主な問題点は次のようです。

(1)　事業は一般の人に参加できるように

出版事業では一般の人も講読できるように，講演会研究会月例会などの事業は一般の人も参加できるような集会にすることを原則としなければなりません。

今まで会員相互の親睦ということが

事業の主体のような傾向がありましたがこの点は改めなければなりません。しかし親睦会のようなものを開いてはいけないということではありません。

(2) 合同総会の開催

協会総会は東西別々に開催されているが，この方法では，社員（会員）の総意を正しく反影する上に問題がるあようです。社団法人では「会費の賦課社員の除名，役員の任免・毎会計年度の事業計画，歳入歳出予算決算」等は総会の議決を要するので合同総会の開催が必要になるものと考えられます。協会は全国組織であり総会の成立その他について多少の問題があるにしても委任状による出席は認められるので，会員の皆様のご協力さええられれば東海道の中間地区で開催可能であると思います。

このような総会を開いても支部は支部として総会を開くことは自由で今までと同じように活動して行けます。

(3) 事業の収益金

公益法人でも「公益事業を行う手段として収益事業を行う」ことは差支えない。ただその収益金を配当その他の型で構成員に配分することはできないと規正されている。

従って講演会展覧会等に入場料を取り収益に差しつかえはないわけで，このような方法を取ることにより会員の負担を増すことなく事業の拡大が計れます。

JID の法人化問題の手続経過について

協会が法人化の方向を打ち出したのは42年8月の理事会です。それ以来，定款改正・会費の値上など具体的な改善を計り，通産省検査デザイン課と打合せを始めたのは42年8月頃からです。現在JIDAと共に法人化の申請を行っていますが頭初検査デザイン課としては，JIDA・室内・クラフトの三団体が行っている。デザイン協議会で申請してほしいとの非公式な意向もあり，手続がおくれましたが現在は3団体別々にという方向に進んでいます。

法人化申請の正式書類は通産局に申請するのであって，現在は許可条件を調整し，内諾を得ようとしている段階です。

申請にあたて問題となる点は次のような点です。

(1) 全国総会の開催（内容前記参照）

(2) 予算規模

会の運営を安定させるためには事務所の所在とか事務員数とか一定の基準があります。これらの点については現在本部の規模で問題ないのですが，会計処理上現在は支部に会費が入り支部から本部会費だけを上納する形になっていますが，これを本部に納入してから支部に配布する形にし，出版事業などの別途会計を含むことにより法人化に必要な予算規模になります。

(3) 会の公益性

定款の「会の目的」「事業」などの項を多少改正し会の公益性を前面に押し出す必要があります。

現在の活動でも公益性があり問題はないわけですが，一般公開の講演会にして行くことが必要でしょう。

今後の進め方としては，これらの点について関係官庁と打合せを進め定款事業などを具体化した上理事会総会に計り，新協会の発足に向いたいと思います。

月例会報告

日米ブラインド新工場見学終る

わが国の建築界が超高層ビル時代に入ってきた今日，この超高層建築に必須の性能を備えた鋼製可動間仕切を一貫生産するための日米ブラインド新工場が，神奈川県内陸工業団地に完成，生産を始められたことを聞き，同社に親しい岩瀬監事の御紹介を得て　心よく見学を承諾していただいたので，10月23日希望者20名が原宿の協会事務局前に集合した。日米ブラインド会社より山崎営業部長がマイクロバスにて迎えにこられ，一同それに乗って12時30分出発。天気は快晴で同工場につくまでの1時間半の道中に工場および製品概略などの話を山崎部長より聞きながら，日米ブラインド社より用意下さったサンドウィッチ・ジュースをいただき，まるでレジャードライブのよう。到着した内陸工業団地は各敷地面積の8割は緑地とするとかの規定がある位であるから緑地の中の工場といった感じのところ。

日米ブラインド工場見学

到着と同時に会議室に案内され，上野専務より挨拶ならびに工場生産設備などの説明があり2班に分れて見学に入った。

新製品の可動間仕切は米国のウオルター・キデイ社と技術提携したもので，その特許部門は公開されなかったがそれでも生産工程を順を追って見ることができたことは収獲であった。

また，新しい工場だけに流れと通路などそれらしいものを見せてくれた。

これは見学（工場）とは別であったが事務所の二階一部に社長の部屋があり，そのインテリアは富士を眺める大きなガラス面，カーテン絨緞などなかなか立派なものであった。

前述のように，二班に分れての見学であったので，途中での技術的質問など集録できないが，各自大変に勉強になったことと思われる。

見学時間は約2時間。帰途も同社のマイクロバスにて原宿事務局まで再び1時間半のドライブで午後5時30分解散した。

見学会は各自の収獲はまちまちであろうが，新製品の技術，材料その他今後の仕事面でのつながりなど大であろうと思われるので，機会をもって次々と行ないたいものである。

（山口記）

ケネス西本氏講演会

11月々例会は，アメリカ在住の建築家ケネス西本氏を招き，21日都道府県会館にて，約100名の出席者で行れました。「アメリカの現代建築の現状」がテーマで，建築とそのインテリアデザインの現状，今後の方向が語られ，日本のインテリアデザイン界に一つの指針を示めされて盛況のうちに終りました。

日本万国博覧会を動かす人々

協会と事務局の組織

日本万国博覧会協会

日本万国博覧会の準備・開催・運営に当たる財団法人〝日本万国博覧会協会〟は，会長および5名の副会長を含む理事52名と監事2名をもって構成されている。そしてこれら52名の理事には，広く日本各界――官・公・財・文化および労働界の代表が選ばれ，理事会として種々の計画・事項を決定しているのである。

しかし万国博覧会は，世界各国がこぞって参加する文化と産業の祭典であり，しかも単に人類の創造的活動を一堂に展示するだけでなく，あるひとつの考え方――テーマに基づいて設計され，つねに新しい文明社会建設の大規模な試みの場として評価されるので，またさらに，約330m² 万の会場に約500億円程度の施設が建設されるため理事会にそれぞれの専門家による専門委員会が設置されている。

日本万国博覧会協会の組織図は別表の如くで，各種専門委員会のほか，常任理事である事務総長の下に事務局が，常任理事会の下に数名の幹事がいる。この**幹事**は，理事会に提出する議題を選定し，その内容を検討して常任理事会に送っている。

テーマ委員会は，学士院会員の茅誠司氏を委員長とする人文科学・自然科学の科学者，作家，評論家，実業家など18人からなり，日本万国博覧会のテーマ，基本理念，サブ・テーマを討議して理事会に提出した。

会場計画委員会は，都市計画協会会長・飯沼一省氏を委員長とする建築，土木，都市計画，造園の専門家15人からなり，会場基本計画を提示した。

会場基本計画の決定に伴い，基幹施設の具体化のためプロデューサー制がしかれ，**基幹施設プロデューサー**に丹下健三・東大教授が委嘱された。

テーマを忠実に反映し具現化するテーマ館についても，展示企画に関するプロデューサー制が採用され，**テーマ展示プロデューサー**に画家・岡本太郎氏が決定し，また，お祭広場を中心にくりひろげられる催し物の企画，プログラム編成，演出を担当する**催し物プロデューサー**に伊藤邦輔・コマ・スタジアム専務が決まった。

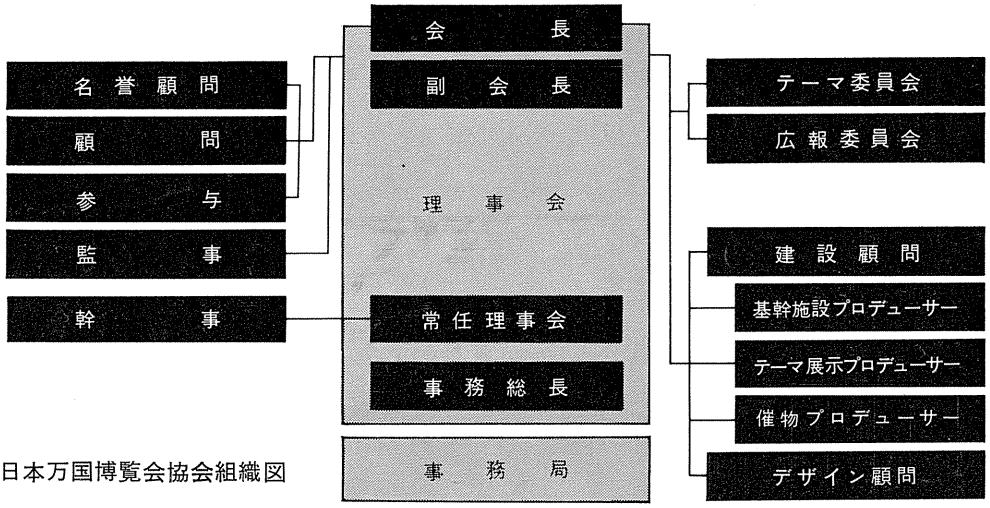
調和のとれた会場づくりへの技術的な助言を行なうため，次の6氏を**会場建設顧問**に委嘱し，

伊藤　　茲　東海大学教授
高山　英華　日本建築学会会長
東畑　謙三　日本建築協会会長
棚橋　　諒　京都大学教授
米谷　栄二　京都大学教授
佐藤　　昌　東京農大教授

万国博に関するすべてのデザインや色彩をひとつの方針のもとで決めるため次の5氏に**デザイン顧問**を委嘱した。

勝見　　勝　東京造形大学教授・デザイン評論家
小池岩太郎　東京芸術大学教授
田中　千代　服飾デザイナー
浜口　隆一　建築・デザイン評論家
真野　善一　松下電器意匠部長

以上のほか，美術館計画を進めるため**美術展示委員会**，会場内につくる周遊鉄道を研究するための**場内輸送委員会**，施設参加募集や資金調達方針などを推進するための**財務委員会**などが，近く設置される。



日本万国博覧会協会組織図

日本万国博覧会協会事務局

日本万国博覧会協会の実際の事務，運営の窓口は，常任理事である事務総長の下に組織された〝日本万国博覧会協会事務局〟である。いま，その組織図をみると，図表の通りである。

監査室は，職員の人事考課と業務の進行状況の監査をし，**秘書室**は秘書，接遇，理事会などの議事を，**渉外室**は渉外関係を，**企画調整室**は業務の総合企画および調整，進行管理に関することを担当する。

総務課は庶務，用度を，**人事課**は人事，給与，福利厚生，組織を，**文書課**は文書，法規，資料を，**会計課**は出納検収，決算を担当する。

財務課は資金計画，予算，補助金総括を，**資金課**は資金調達を，**契約課**は工事請負などの契約を担当する。

出展管理課は出展規制の企画および実施，施設参加を，**国内出展課**は国内出展招請の企画および実施，契約を，**外国出展課**は外国出展招請の企画および実施，契約を担当する。

営業課は営業参加の企画および実施，契約，営業施設，マークの使用承認などの商業的権利などを，**テーマ・美術課**はテーマ展示施設，美術展示の企画および実施，美術展示施設などを**芸能・娯楽課**は芸能の企画，実施および契約，娯楽の企画，実施および契約など，お祭広場，劇場などの施設に関することを，**観客課**は観客誘致，宿泊対策，入場券などに関することを担当する。

会場管理課は会場管理の企画および実施，会場内の警備および防火対策，情報管理に関することを担当し，これがため電算機班が附属している。**会場サービス課**は会場内サービスの企画および実施，会場内の衛生，清掃などに関すること，博覧会のデザインポリシー，会場内の広告規則に関することを担当し，これがためデザイン班が所属している。ストリート・ファーニチャ，サイン計画などは，ここの所管で

ある。**通関・輸送課**は通関および貨物の輸送，会場内の貨物取扱い，観客輸送，駐車場などに関することを担当する。会場内の輸送施設はこの課の所管である。

建築部計画課は会場基本計画の企画，実施を担当し，**土木課**は会場の敷地造成，道路，橋梁，人工湖などを，**建築課**は建築物の設計・施工，参加建築物の規制などを，**施設・緑地課**はガス，電気，水道，通信などの施設および造園を担当し，**工事事務所**，**工務課**はこれらの建設の現場監理を行なう。

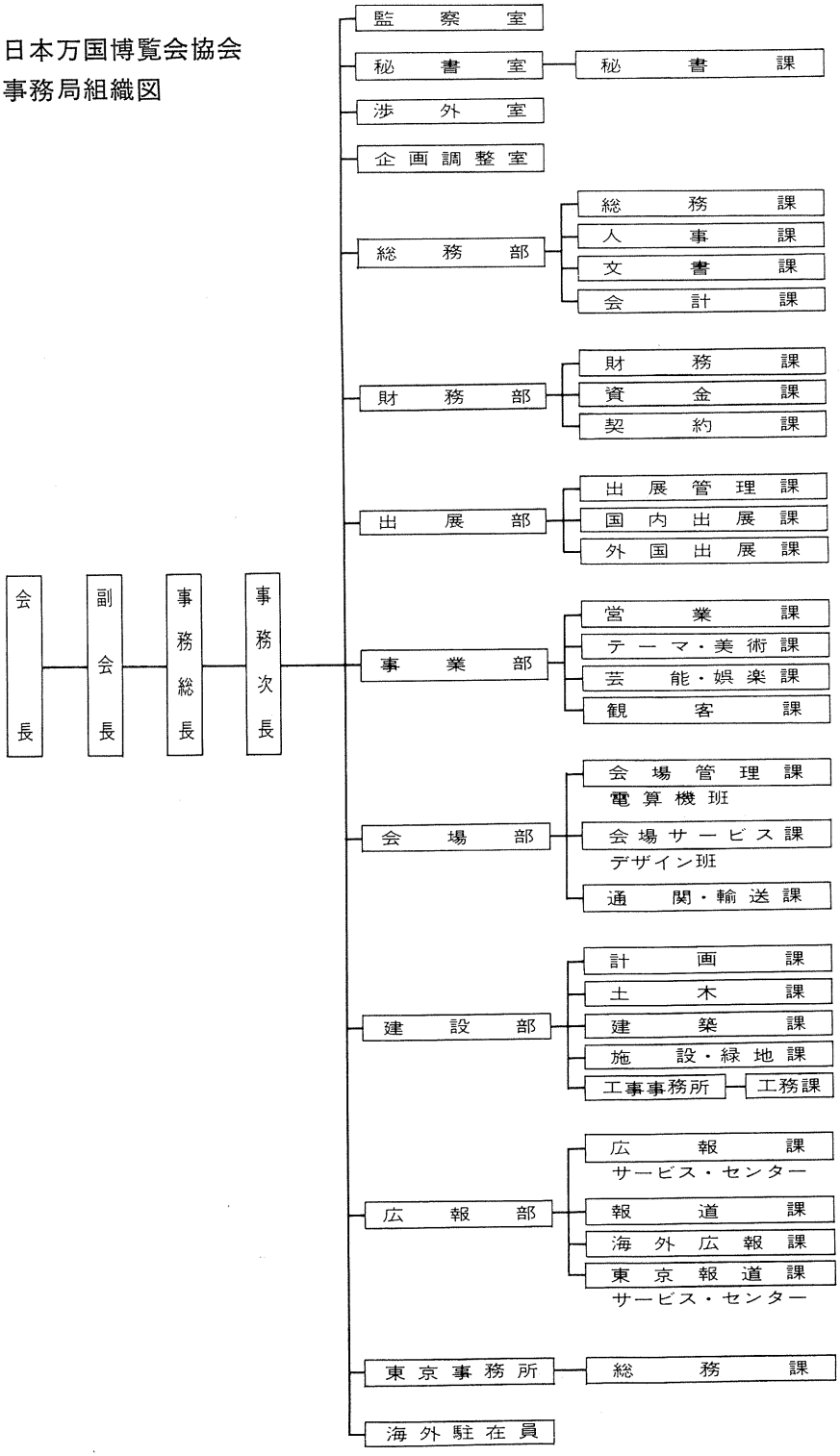
広報課は国内広報，行事の企画，実施デザインポリシーを，**報道課**は報道機関との連絡調整を，**海外広報課**は海外広報，海外情報の収集を，**東京報道課**は東京における報道と広報を担当する。広報課，東京報道課に設けられた**サービス・センター**は，万国博に対する要望，提案，相談および照会の処理，資料の提供，概要の説明，一般的な寄付の受付けなどに当っている。

東京事務所は，総務課が独立してある外，出展部各課（出展管理，国内出展，外国出展）および営業課の係と，広報部の東京報道課があり，この総務課は，これらの庶務を担当するとともに，政府などとの連絡にあたるのである。

各課は，建築部の土木，建築，施設緑地の3課および工事事務所を除いて，主として2～3の係に分かれ，3～4名の事務官でそれぞれの業務を行なっている。従って，専門事項に関しては調査役，参事，嘱託などの形式でこれに参与させているが，デザイン関係に関しては，広報部を除いて会場サービス課の**デザイン班**のみで，ここに属するID，インテリア，グラフィックの3名のデザイナーが，ストリート・ファニチャーから制服，サインボード，色彩や商標表示の規制まで，およそ会場におけるデザイン関係すべてを担当され，予算案の作成，それぞれの専門デザイナーへの委嘱など，デザインの窓口をされている。

一般的にすべての決定は，最終的には理事会において行なわれるが，事務局で原案を作成し，幹事会が選定して常任理事会に提出し，理事会で決定する。しかしデザインに関しては，プロデューサーや専門委員会が設けられ，これらより理事会に提出される。

日本万国博覧会協会事務局組織図



日本万国博をつくる人々

施設とそのデザイン

大阪市の都心から北東へ約 10km—吹田市千里丘陵の約 300 万 m² に建設される日本万国博覧会の施設は，これを大別すると，展示施設と基幹施設の二つにすることができよう。

万国博の花といわれる**展示館**は，日本政府をはじめとする各国政府，国際機構，内外の民間企業，各種団体などが，それぞれ夢にあふれた楽しい展示とすばらしい展示館とを出現させようと，アイディアを競っている。出展参加が確定している国や企業は次のとおりである。（昭和42年10月26日現在）

カナダ　大韓民国　アメリカ合衆国　中華民国　オランダ　ザンビア　ソ連　ベルギー　香港政庁　西ドイツ　スイス　ニュージーランド　フランス　オーストラリア　ブルガリア

クウェート　イギリス　コンゴ
H・A・ハーカビー社（米・集合特設館）　イーストマン・コダック社（米）　アメリカン・パーク社（米）
三洋電機　電気事業連合　久保田鉄工　フジパン　サントリー　ワコール　日本繊維館協力会
住友館準備委員会　松下電器産業
日本瓦斯協会　みどり館準備委員会　宝椅子販売　リッカーミシン　大阪基督教連合会　日本民芸館準備委員会
リコー　日本鉄鋼連盟　万国博古河館推進委員会　日本ペプシコーラ　日立製作所　三菱万国博綜合委員会　東京芝浦電機
三井グループ　日本自動車工業会
日本化学工業会　富士グループ万国博出展委員会　読売新聞社
国際化成公社　日本アイ・ビー・エム

一方，日本万国博の基本的な幹であり，テーマの精神の流れる動脈である**基幹施設**は，テーマを集約的に表現する〝シンボル・ゾーン〟，楽しい万国博の立役者である娯楽施設，動く歩道装置道路を含む輸送機関，万国博のすばらしさを存分に味わうことができるよう設けられるEXPOサービス施設，万国博の裏方さんの管理施設などからなっている。

シンポル・ゾーン

シンボル・ゾーンはお祭広場を中心として，テーマ館，劇場（多目的ホール）をかかえた可動屋根が計画され，この広場の周囲には，美術館，ショッピング・ストリート，飲食店街，屋外展示場，ランドマーク（展望台）などの施設が計画されている。

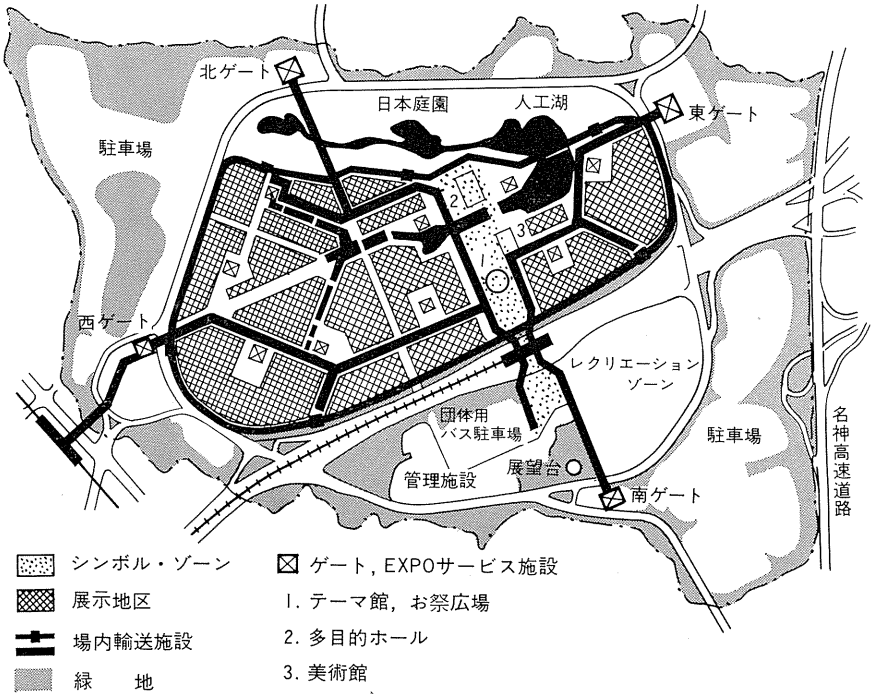
シンボル・ゾーンの計画は，基幹施設プロデューサーである丹下健三・東京大教授が当り，同氏のもとで実際の建設設計を行なう次の12氏がおる。

福田　朝生　双星社竹腰建築事務所長
彦谷　邦一　彦谷建築設計事務所
大高　正人　大高建築設計事務所
菊竹　清訓　菊竹清訓建築設計事務所
神谷　宏治　都市建築研究所
磯崎　　新　磯崎新アトリエ
指宿真智雄　建築デザイン事務所
上田　　篤　京大助教授
川崎　　清　京大助教授
加藤　邦男　京大助教授
曽根　幸一　東大助手
好川　　博　日建設計工務

また，テーマ館の展示については，画家の岡本太郎氏がプロデューサーとなって，十数名のスタッフにより計画を進めている。

美術館

美術館は，そこに展示される作品，展示構想などに左右されるため，国立西洋美術館長・富永惣一氏を中心に，稲田清助・文化財保護委員会委員長，河北倫明・国立近代美術館次長，岡田譲・東京国立博物館学芸部長，松下隆章・文化財保護委員会文化財鑑査官の5民で基本計画を練り，さらに美術展示委員会に発展させて美術館建築，展示，作品リストアップの3専門部を置いて計画を進めている。



迎賓館

モントリオール万国博の各国のナショナル・デーの式典には，その国の国賓が招待されている。日本万国博のナショナル・デーも同じであろう。各国の国賓や高位高官者のための迎賓館は本部ビルのようにその設計案を募集することは，日程的に無理となったので，これを特定の建築家に委嘱する模様で，建築家協会員から選ばれよう。

ショッピング・センター

万国博への参加には，展示館を建てて参加する出展参加が中心になるが，これ以外にも万国博の内容を豊かにするため，いろいろな参加方法がある。催し物参加，施設参加，営業参加がそれである。

ショッピング・センターの〝世界の名店街〟や世界の味を集めた飲食店街の〝世界のうまい店〟などは，この営業参加となり，その参加者がその施設を設け営業することとなる。協会はこの営業参加を募集している。

営業参加としてはこの外，会場内のサブ広場などに予定されている食堂や売店などもある。

場内輸送施設

会場内の思い思いの場所へ大観衆を運んで行く場内輸送施設は，展示館の周辺部を一周する軽量軌道と，展示地区を走るバスとが考えられる。これら場内輸送の基本調査については，近畿日本鉄道が協会の依頼をうけて報告し，これらの乗物についての研究は，国鉄研究所などに依嘱している。

娯楽施設

娯楽施設の基本調査は阪急電鉄に依頼し，娯楽地区の基本構想も報告されているので，これに従って各遊戯施設について研究がなされている。

EXPO サービス施設

会場のあちこちに設けられるＥＸＰＯサービス施設には，会場案内，電話・郵便・銀行窓口，食堂，喫茶店のほか，託児所，救急センターなどがあるが，これらはユニット化され，工場で量産されるよう研究されている。

これについての調査研究は，ＧＫグループが工芸ニュースに掲載しているので，すでに充分ご承知と思われる。

このサービス・ステーションは，施設参加で，シチズン時計が会場の適当な場所に提供を，また迷子センターとカメラ・サービス・センターをミノルタカメラがつくりたいとの申出がある。

施設参加は，万国博を運営していくうえで必要な施設，資材あるいは物品を，海外，国内の企業や団体，個人が提供または無償貸与するものである。この対象となるのは，美術館，噴水，場内交通の一部，娯楽施設，さらにテーマ展示の施設，制服，ベンチ，灰皿，屑籠，子供用ワゴンなど多岐にわたっている。

本部ビル

管理施設の中枢施設である本部ビルは，その設計案を全国の１級建築士から競技募集し，大阪の根津耕一氏の案が最優秀に決まったことはご承知の通りである。

（後記）万国博施設のデザインは，日々決定しているため，これが印刷される時点では，すでに多くのものが決定していると思われる。しかしこれをスクープすることは，そのニュースソースの方々に迷惑をお掛けするので，協会が公式発表している以外，なるべく記事をさしひかえた。しかし中には，私自身の勘違い，聞き違いもあるやも知れないので，誤りはご勘弁願いたい。

日本万国博覧会協会役員

●万国博担当大臣　椎名悦三郎（通産大臣）

●会長・常任理事　石坂　泰三（経済団体連合会会長）

●副会長・常任理事

堀田　庄三　（ＫＫ住友銀行頭取）
芦原　義重　（関西電力ＫＫ社長・関西経済連合会会長）
井上　五郎　（中部経済連合会会長）
永野　重雄　（富士製鉄ＫＫ社長）
菅野　義丸　（前日本国内航空ＫＫ社長）（常勤副会長）

●常　任　理　事

左藤　義詮　（大阪府知事）
中馬　　馨　（大阪市長）
足立　　正　（日本商工会議所会頭・日本民間放送連盟会長）
市川　　忍　（大阪商工会議所会頭）

●事務総長・常任理事

鈴木　俊一　（前東京都副知事）

●常務理事・常任理事

里井達三良　（大阪商工会議所専務理事）

●建　設　顧　問

伊藤　　茲　（東海大学教授）
高山　英華　（日本建築学会会長）
東畑　謙三　（日本建築協会会長）
棚橋　　諒　（京都大学教授）
米谷　栄二　（京都大学教授）
佐藤　　昌　（東京農大教授）

●基幹施設プロデューサー

丹下　健三　（東大工学部教授）

●テーマ展示プロデューサー

岡本　太郎　（画家）

●催物プロデューサー

伊藤　邦輔　（コマスタジアム専務）

●デザイン顧問

勝見　　勝　（東京造形大学教授・デザイン評論家）
小池岩太郎　（東京芸術大学教授）
田中　千代　（服飾デザイナー）
浜口　隆一　（建築・デザイン評論家）
真野　喜一　（松下電器意匠部長）

●建設設計スタッフ

福田　朝生　（双星社竹腰建築事務所社長）
彦谷　邦一　（彦谷建築設計事務所）
大高　正人　（大高建築設計事務所）
菊竹　清訓　（菊竹清訓建築設計事務所）
神谷　宏治　（都市建築研究所）
磯崎　　新　（磯崎新アトリエ）
指宿真智雄　（建築デザイン事務所）
上田　　篤　（京大助教授）
川崎　　清　（京大助教授）
加藤　邦男　（京大助教授）
曽根　幸一　（東大助手）
好川　　博　（日建設計工務）

●催物スタッフ

渡辺　武雄　（お祭広場担当）
村山　未知　（クラシック音楽担当）
渡辺　美佐　（ポピュラー音楽担当）

●テ　ー　マ　委　員

赤堀　四郎　（阪大総長・学士院会員）
井深　　大　（ソニー社長）
大原総一郎　（倉敷レイヨン社長）
大仏　次郎　（作家）
大来佐武郎　（日本経済研究センター理事長）
茅　　誠司　（学士院会員）（委員長）
貝塚　茂樹　（京大人文科学研究所教授）
桑原　武夫　（京大人文科学研究所教授）（副委員長）
駒村　資正　（日本貿易振興会理事長）
曽野　綾子　（作家）
丹下　健三　（東大工学部教授）
東畑　精一　（アジア経済研究所々長）
豊田　雅孝　（参議院議員）
松方　三郎　（共同通信社顧問）
松本　重治　（国際文化会館専務理事）
武者小路実篤（作家・芸術院会員）
村山　リウ　（大阪ユネスコ協会理事）
湯川　秀樹　（京大教授）

大阪支部討論会

ヨーロッパ伝統家具復元展

大丸の研匠会は，家具に関する創作デザインと優秀な製作技術を誇りとして，毎年新しい作品を発表しておりますが，本年は特に創業250年記念として，ユニークな現代家具と共に，香り高い近世ヨーロッパの代表的な家具を精密に復元した伝統様式の家具を展示しました。

大阪支部ではこれを9月の例会にとりあげ，その展示会を見学すると共に，この設計を担当された大丸デザイン室の方々，製作に苦労された大丸木工の担当者，販売に当られる家具売場の方，それにこの指導をなされた京都工芸繊維大学の野口助教授にご出席願い展示会の主旨，製作段階でのご苦労談などを伺い，さらに伝統様式家具とその復元について討論を行ないました。この日は多くの会員のほか，会員でない若い方々も数多く出席されいろいろな意見感想質問が交されました。

陳列内容

■初期イタリア・ルネサンス様式（15世紀中期～16世紀初期）よりサヴォナローラ・チェア

■ルイ16世紀様式（18世紀後期）のテーブルと椅子

■ジャコビアン様式（17世紀初期～17世紀中期）のテーブル，椅子および食器棚

■クィーン・アン様式（18世紀後期）のテーブルと椅子

■アダム様式（18世紀中期～18世紀後期）のテーブルと椅子

■ヘップルホワイト様式（18世紀中期～18世紀後期）のテーブルと椅子

■シェラトン様式（18世紀中期～19世紀初期）のテーブル，長椅子，椅子および書棚

■モダン・アンピール様式（19世紀中期～現代）のテーブルと椅子

計画・図面作成　大丸・デザイン室
資料提供　京都工芸繊維大学
監　修　京都工芸繊維大学　助教授　野口　茂
製　作　大丸木工
彫刻・象嵌　後藤更星
裂　地　別織品　川島織物
　　輸入品　英国サンダーソン社

伝統家具復元の主旨

大丸デザイン室　安永一典

伝統家具への憧れと要求は，最近ますます強力になる傾向にあります。それは現代の量産家具に対する人間味の要求でもあり，さらに本質的な歴史に対する憧憬でもありましょう。しかしただ時代の要求に迎合して，表面的な様式のアレンジに終始して家具を作り出すことは簡単なことかも知れませんが，それは家具の歴史にも無縁ですしまたデザイン上でも好ましい傾向とはいえません。

一般の大衆を対象とすることは勿論ですが，家具デザインに携わる者にとって，このあたりで一度本格的に家具の歴史をふりかえり，正しい解釈と歴史が生んだ必然的な様式に開眼することは，その今後にとっても決して無駄なことではなく，むしろ遅きに失した感すら致します。

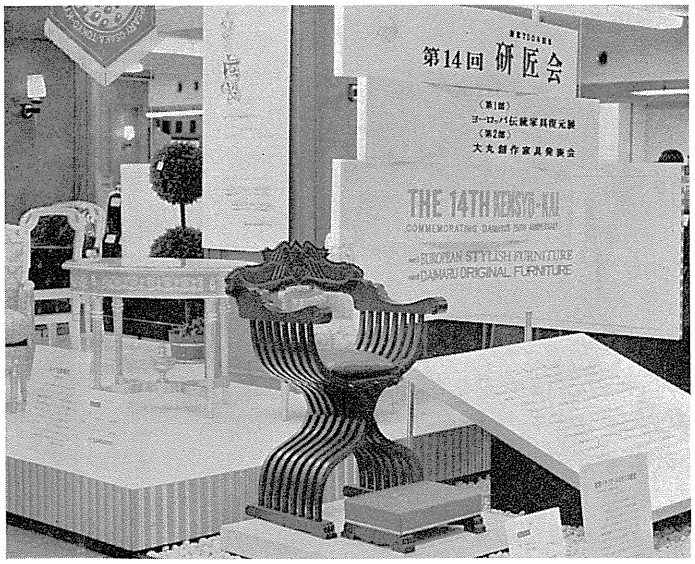
またそれらの家具の現物は，美術品扱いとして最近はほとんど手に触れることもできずに日々老朽化して行くのみです。そのためにもこれをいま復元することは，それを求める顧客の要求に応えると同時に，教育機関への教材，設計・デザイナーへの資料，その他の関係者への知識と技術の啓蒙などに役立つものと考え，ここに復元したものです。

様式家具研究の意義

野口　茂

われわれインテリヤ・デザイナーがヨーロッパの様式家具について最初に接するのは，学校において西洋工芸史の学科や，実習時間に現物を実測させられるのが始まりと思われる。その時期にあっては大抵「つまらぬ過去の残骸・遺物をいまさら…」と，怠屈で無意味な時間の浪費のように感じ，真剣に取り組んだ記憶のある人は会員の中でも少ないのではないか？　と思われる。という私自身もその譬えの如く随分抵抗を感じたものだった。現在自分が一教師として学生にその講議や指導にあたりながら当時の事を追想し，われながら苦笑することも屢々である。現代の学生諸君は，私達の頃よりもさらにそれらの疑念や抵抗は強いのでは

クィーン・アン様式のイス（18世紀初期）



会場風景（大阪・大丸）

なかろうか？

椅子といえば，ミース・ブァンデルローエ，イームズ，サーリネン，ジャコブセンなど，モダンな家具がすぐ現実に眼前に展開し，材料的・技術的にも，また生活的にも，過去幾千・幾百年以前のものを実測して何の効果や利点が得られるのであろうか？　と，兎角若い世代は向上心旺盛のあまり，新しいものや未来の夢を描くに急で，過去のものを敬遠し勝ちなため教育効果は上がりにくい。しかしこれらの課程はデザイナーとしての基礎課程で，直接には現代にも未来にも繋がらないし，すぐ利益にもならないかも知れない。自分の体験を記して申し訳ないが，私自身，過去の遺物と感じ無意味なものとして深く顧みなかった時期も長い。しかしこの分野の研究を手掛け進むにつれて全く貴重な文化的遺産と感じはじめ，興味をもつようになった。

現代の家具，将来の家具を研究するにもその基盤は過去であり，規範である。「基礎のないものは根無し草同様で，終生大地に根を下ろすことなく終る」という言葉は，基礎教育を担当する者のよく用いる言である。といっていまさら過去の様式家具がそのままの形態で現代に継承され，生活に結びつくとは考えられないし遺産は遺産でその域は出ない。しかし様式家具の研究は，この領域のデザイナーにとって必修の事項である。

様式家具の研究，その目的とするところは，ただその形態の変遷や装飾紋様の推移を把握するに終ることなく，そのよってきたるところの何物であるか，すなわち，人間と家具との関係を究明することにある。様式家具が成立した諸条件――地域・気候・風土などの自然環境や，政治・経済などの社会環境を洞察し，当時の家具需要者の生活背景をも正確に把握して，それらの集積造形体の結晶である道具として家具を考察することである。

つぎに，古い物の内にある近代性や合理性を摘出して現代に活かすことである。また未来に通ずるであろう何物かを探求することでもある。古いもの中にも現代に通ずるものが多々ある。その一例として，エジプトの王座の力学的構成，ロココ様式の人を抱擁するが如き自由な曲線形態，クイーン・アン様式やネーザランド地方の家具に見られる人間工学的な配慮など，参考例を挙げればきりがない程である。著名なミースのバルセロナー・チェアーは古代エジプトやローマの折りたたみ脚の椅子の曲線からヒントを得たかもしれないし，サーリネンの椅子の彫刻的形態はロココ様式の柔かな曲線からヒントを得たかも判らない。（これらは勿論筆者の一私観であり，こじつけた解釈に過ぎないと思うが…）

また，現代全く無意味化していると思われる装飾も，心理的機能や感覚に訴える強い要素をもっており，次期の新しい家具の一要因をなすかもわからない。デザイン思潮で叫ばれている「非合理の合理性」の研究の足掛りになるやも否定できないことである。

概して「歴史は繰返され，流行という現象も回転する」といわれる。前記の如く，過去の姿そのままの繰返しは考えられないが，現代「西洋物質文明のゆきづまり」，「機械文明の反省」といったことから，「伝統の再検討・再発見・再認識」が叫ばれている。そのような意味で，様式家具の伝統の少ないわが国においても，導入されてより約一世紀を経ており，技術的では欧米に匹敵する高い水準のものも生産されている反面，「未だし」の感のあるものも多い。欧米の彼等が幾千年を通じて築きあげ積みあげてきた貴重な体験や，様式家具の真価を再検討し，歴史的史実を通して現代にも適用できる何物かを摑み出し，明日への創造の糧にすべきであろう。

今回，株式会社大丸が創業250周年を記念してヨーロッパ伝統家具の復元を試みられ，多大の費用と労力を惜しまず完成されたことは，その衝に当られた人々は勿論，業界の方々にも大いに意義のあったことと思われる。幸い小生の奉職する大学図書館に，往時の正確さを伝えると思われる現物が多数あり，これを中心に厳密に復元されたもので，現物のないものについては，可能な範囲で史実や文献その他の資料を収集整理し製作にあたった。途中，不明な個所や現代の技術では不可能な点も若干あり，製作者側を困窮させたが，結果としては，まず目的が達せられたと思われる。ただ完全復元ということは至難というよりも全く不可能であると悟った。なぜならば，現時点では，家具を作る人間の問題，次に材料・工作・工具・塗装・布地など，経費の関係上からも絶体的厳正なものはできないことで，これは長い時間の隔たりからも肯定できることである。

しかしこのような地味で基本的な研究が，ひたむきな努力によって完成されたことは誠に喜ばしいことであり，この点，多大な犠牲を惜しまず企画発表された大丸の英断・雄図は，業界に大きな刺戟と緊張を与えたものと思われる。私自身この企画に参画の機会を与えられ，更に多くのものを得られたことを心より感謝するとともに，今後様式家具にとどまらず，インテリヤ業界発展のために，基本的な研究を各社がこぞってなされることを希望してやまない次第である。

（注）当日の討論の中で，様式家具，クラシック家具の静かなブームが話題に上り，これらの家具製作の採算性やその量産（小量ではあるが）などについての議論がありました。

クラシック家具はあくまでも高級品

山本和仁

現代の生産家具と比較して，その木組は不合理であり，その安楽性は少ないし，彫刻は不必要であり，飾りも多すぎるクラシックな家具。しかし私達はなぜかそれにひかれ，それに何かを求めようとします。そしてやがてクラシックのブームがやってきて，その生産体制が必要になるのではないかと予想する人達もおります。「現代の生活にクラシック家具はどのような役割や意味をもっているのだろう。」，「いったいクラシック家具の何にひかれるのだろう。」，これを知るのが，この復元展に対する私の一つの目的でした。

現代生活においては，クラシックな家具は一種の高級品としての価値づけをされていますし，それは一部の特定な人達に使用されるのです。クラシック家具の静かなブーム，それは一種の高級品としてのブームであり，それは一部の特定の人達におけるブームでしょう。また日本では，ミースのバルセロナ・チェアーやヤコブセンのエッグ・チェアーは，現代の高級品家具として1脚数十万円で販売されています。

クラシック家具は，現代の機能主義的な家具とは全く逆の方向へ進んでいる家具ですし，複雑で高度な技術や工程を必要とする家具です。しかしその複雑さや不合理さも，またその価格も，高級品・特定の人達の家具という意味で無視することができるのではないでしょうか。これをいわゆる流行させ，そして量産体制を考える，そんな性格が果してクラシック家具の中にあるだろうか。量産とかパブリックな性格をクラシックの家具に入れることは，はたしてよいものだろうか。私はこの日の討議の中で，こんな疑問を懐いた。

（昭42京都美大卒・日建設計工務）

第2の機能を求めよ

柴田嘉夫

種々の意見や質問がなされた。クラシック家具展を開かれた大丸にどんな考えがあるのか？　商売としてやれるのか？　量産をどうやるのか？　座りごこちや形の話。

確かに大丸がこのような企画をされたことについては，近頃，大衆のクラシック家具に対する欲求がうかがえるし，その意味では，クラシック家具について勉強し，本物を作ってみられた努力に対しては敬意をはらうのではあるが，しかしそれは飽くまで，単なる復元であり，そのもの自体歴史的な考察の域にとどまる。

室内設計家協会が，あえてこれを取り上げてここにこの会が催されたことは，われわれ専門のデザイナーとして，これらのクラシック家具の皮層的な問題を云々し，だからクラシック家具を現代にアレンジして生かすというような話をするのでなく，これらの本質的なかつての家具の存在をつきとめ，明日のわれわれのデザインの方向をさぐるべき会としなければ意義がないに等しい。この点での相互の意見のぶつかり合いが必要ではないか。

ではこの点とは？　例えば，これらの家具が座るという用途以上に為政者の権威を象徴していた。今日的に考えて，何故座るための椅子があのように権威を表す道具であり得たか。それは座るという行為が，その運動的行為のみでなく，それ以外の精神に作用するもう一つの機能を持ち得るにちがいない。むしろその当時，座るという用よりもそれ以上にもう一つの機能が重要であり，そのものから家具というものができていたといえるであろう。それらが，近代主義，機能主義により，座るという運動を一元的にとらえるようになってしまっている。

われわれはこのクラシック家具の中から，再び現代の第2の機能――昔の権威に代るべき機能を見いださなければならないし，設計家協会はそれをしていくべきではなかろうか。

（昭41京都美大卒・日建設計工務）

事務局だより

本会も今年の11月で10周年を迎えることになり，設立当時の小さな事務所からやっと今日の恵まれた場所をもつことができました。

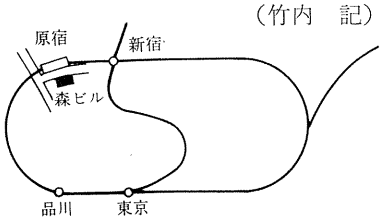
今までの会報では写真をもって，全国の会員の方々に事務局風景をご紹介できず残念に思っていましたが，会報も新たに一転しましたのでこの機会を利用し写真でご紹介いたします。

また42年度事業方針の一つである「事務局の確立」のために事務局員を増員しましたので，40年度より勤務されている荒川さんと，新たに入局された加藤さんを写真をもってご紹介いたします。

現在の事務局は40年度に開設されたもので，別図のごとく非常に便利な場所にありますから，地方の会員の方々も自分のサロンと思われ，気楽にご利用下さい。

事務局は土・日・祭日お除き午前10時より午後5時まで開いてをります。

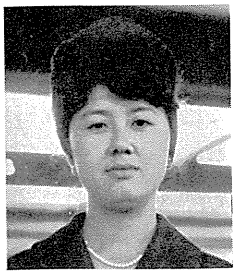
（竹内　記）



原宿駅坂下口前

事務局風景（東京・会報小委員会）

荒川純江（あらかわすみえ）　昭和13年8月5日生
現住所：渋谷区神宮前5―19―101
学歴は昭和32年高崎女子高校を卒業され，趣味は手芸とのことです，紹介者は会員・山口勇次郎氏



加藤節子（かとうせつこ）　昭和9年7月6日生
現住所：大田区北馬込1―31―9
学歴は女子美術短大服飾科を昭和30年に卒業され，趣味は生花・音楽とのことです，紹介者は会員・田中聰行氏

■賛助会員紹介

TOYOBO じゅうたん・カーテン・壁張り・設計・施工

東洋紡インテリア株式会社
本社・大阪市北区梅ヶ枝町108 TEL(361)9771－5
東京・名古屋・福岡・松山・広島・北陸

■新入会員紹介

準会員（東京）中田（なかだ） 伊代子（いよこ）
（昭和17年9月24日生）

横浜国立大学・学芸学部美術科と桑沢デザインスクール・2部インテリヤ住宅科を40年に同時卒業。

推薦者の宮内順治氏は「室内家具技術は正会員としての実力は充分あるが，実務年限がまだ2年のため一応準会員に推薦した」

現住所　横浜市鶴見区東寺尾町1391　出口荘

勤務先　富士装備株式会社　新東京ビル・ショールム

（事務局の手違いで会報31号に紹介できなかったことを深く御詫びします）

準会員（東京）近藤（こんどう） 均（ひとし）
（昭和17年8月21日生）

東京経済大学・経済学部を40年に卒業，日本デザインスクール・インテリアデザイン科を41年卒業。

推薦者剣持仁氏は「彼は大学で経済学を専攻していたが，当時からデザインに興味を抱き卒業後デザインスクールで学び現在に至っている。人格円満，真面目な性格である」

現住所　千代田区駿河台1－6　福寿堂

勤務先　職業訓練大学木材加工科　木材加工設計計画研究室

■編集後記

湖面には，鋭い雨足が時々音をたてて走り過ぎ，愁色にとざされた浜名湖畔は，ある晩秋の一日を終えようとしていました。しかし会場，スズキ荘の一室では，初の東西合同による会報編集会議が次第に熱を帯びながら続けられ，議論は時に社会の裏面を衝き，人情の機微を語りながら，遂には東西人気質論に発展し，はては心情のむなしさを深夜に持込む結果となりました。

だが，これも無意義ではありませんでした。当会報32号は，東西編集協力初の成果を示すものとなりますが，従来に比べ，関西の支部会員に依る記事が増したことが目立ちます。紙数の多寡で云々する積りはありませんが，矢張り，全国組織である協会の機関紙として，東西意見交流の場が具体的に一歩拡げられたという意味で喜ばしいことだと思います。

次号からは，この芽を摘みとることなく，会報内容の充実に一そう力を注ぎたいものと一同，意を新たにしております。（大阪支部・本田安治記）

この会報は全国組織の協会のものでありながら，前号までは編集を東京支部のみに行っており，各号ともいつも東京の一方通行的な感があり，われわれ東京の編集部員一同常に気にかけていた問題でした。

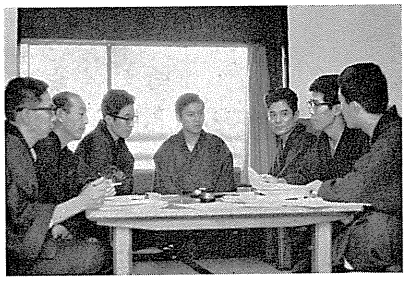
しかし今回の浜松における東西合同編集会議の成果として，大阪支部に強力かつ積極的な体制が確立することにより，会員相互の唯一の交流の場として意義のある会報の実る方向ができたことは喜ばしい次第です。

その後大阪支部において飯田，本田両氏の呼びかけによって12月1日大阪広報会議が開かれ5名の会員が出席され，再度呼びかけを行い1月16日編集方針会議が開かれたとのことです。

なお会報33号は大阪支部のメンバーによる編集で発行されます。皆様どうか御期待下さい。

本号は特に東西合同編集を記念して東西両編集後記と致しました。

（東京支部・三宅正郎記）



東西合同編集会議（浜名湖スズキ弁天荘）

編集委員の忘年会（12月25日）

機関誌・JID・32号　昭和43年2月　発行　発行人　中村圭介　編集　日本室内設計家協会　広報部会　印刷所
発行所　日本室内設計家協会　東京都渋谷区神宮前1—14—34　森ビル・電話　403－6647　（株）カタログ社
部長　榎田　均　（東京）竹内篤　泉修二　三宅正郎　織田武巳　高橋岩夫　牧野達夫　（大阪）飯田敏彦　本田安治